高齢者向けレジリエンス尺度作成の試み

○石盛真徳

(追手門学院大学経営学部)

キーワード: レジリエンス, 高齢者, 尺度作成

An attempt to construct a scale of resilience for the elderly

Masanori Ishimori

(Faculty of Management, Otemon Gakuin Univ.)

Key Words: resilience, the elderly, development of a scale

目 的

近年, 心理学のみならず, 看護学, 社会福祉学等の幅広い分野で注目を集めているレジリエンス概念であるが, 現在までのところ高齢者向けの尺度は開発されていない。そこで本研究では, 高齢者向けのレジリエンス尺度を作成し, その妥当性について検証的因子分析を用いて検討する。加えて, 作成したレジリエンス尺度と杉下・朝田 (2009) の高齢者用うつ尺度短縮版および老研式活動能力指標 (古谷野ら, 1986) との関連性の検討も行う。

方 法

本調査では, これまでの先行研究で用いられた項目の多くを含む形で包括的にレジリエンス概念を検討している井俣・中村 (2008) のレジリエンス 4 側面を測定する 4 つの尺度 101 項目を主に参考にして, 高齢者向けのレジリエンス尺度を作成した。井俣・中村 (2008) のレジリエンスに関する 4 尺度は, 自分自身がレジリエンスを認識しているかどうかの「認知」, レジリエンス要因を実際の行動レベルで利用しているのかの「活用」, レジリエンス要因が「個人」内に備わっているものであるのか, そして, 個人の外側の「環境」内に存在しているものなのか, についてそれぞれ個別に問う形式で構成されている。井俣・中村 (2008) は, それらレジリエンス 4 側面の 4 尺度について個別に因子分析を行い, 各尺度の妥当性を検討している。ただし, 本調査では, 井俣・中村 (2008) の「認知・活用」と「個人・環境」という 4 側面の区分が, レジリエンスの概念的な研究上の検討には有効であっても, 実際の活用に関してはあまり意味がないと考え, 4 側面すべての項目を同じ尺度内の項目として利用した。また, 井俣・中村 (2008) のレジリエンス尺度は, 大学生を対象として作成されていたため, 学校場面を想定するなど高齢者には該当しない項目も含まれていたため, それらについては除いた。また, 包括的尺度とはいえ井俣・中村 (2008) には含まれていなかった小堀ら (2002) や Shen & Zeng (2011) のレジリエンス尺度の項目を追加した。さらに, 石井・近森 (2006) による高齢者の介護を行う家族のレジリエンスの構造要素分析を参考にして, 家族のレジリエンス要因の項目も追加した。それ以外にも, 高齢者に特有と考えられるレジリエンス要因についてケアマネージャー等の専門家と一緒に研究会で検討を行った項目を独自項目として追加し, 最終的に計 68 項目を作成した。質問紙は, レジリエンス尺度の他に, 高齢者用うつ尺度短縮版, 老研式活動能力指標, デモグラフィック要因を尋ねる項目などを含めて構成した。

今回の調査は, 2013 年 5 月～6 月に京都市内の老人クラブ, 社会福祉法人くらしのハーモニー, 社会福祉法人健光園, 嵐山学区女性会, 西院地域包括センター, 社会福祉法人播磨灘を通じて, 60 歳以上の会員および利用者に調査への協力を依頼し, 質問紙法で実施した。質問紙の配布・回収についても各団体に依頼した。回答に不備があったものを除き, 最終的

に, 男性 305 名, 女性 364 名, 不明 4 名の計 673 名から有効な回答を得た。調査対象者の平均年齢は, 75.43 歳であった (標準偏差 6.17)。

結果と考察

作成したレジリエンス尺度計 68 項目について探索的因子分析を行い, 固有値の減衰状況と因子パターンの解釈可能性から 8 因子を抽出した。そして, どの因子にも 0.3 以下の因子負荷量しか持たない項目を削除し, 残った 56 項目について再度, 因子分析を行った。その結果, 基本的には, 井俣・中村 (2008) の 4 側面を考慮しない場合の, 因子と対応した内容の因子が得られた。そこで各因子に高く負荷する項目に従って, 第 1 因子を「楽天的思考・行動」, 第 2 因子を「友達・近隣資源」と命名した。関心の持続・多様性, 熟慮行動, 気ばらし行動および有能感に関連するを含む第 3 因子を「生活での積極性」因子, 第 4 因子を「家族資源」因子, 第 5 因子は「専門家資源 (医師)」, 第 6 因子を「社交性」因子, 第 7 因子を「状況分析行動」, 第 8 因子を「有能感」とそれぞれ命名した。

次に, 探索的因子分析での因子構造を参考にして検証的因子分析を行った。なお, 高齢者に尺度に回答してもらう際の負担を考慮すると 56 項目では多すぎるため, 検証的因子分析では探索的因子分析の 8 因子から, 因子負荷量が高く内容的にも偏らないように 3 項目ずつを選び, 尺度の妥当性を検討した。その結果, 探索的因子分析で見いだされた第 8 因子の「有能感」因子を, モデル全体の適合度 (データとの当てはまりの程度) を下げるために削除した 7 因子モデルが妥当であることが確認された。

さらに, 2 次因子分析モデルを検討した結果, レジリエンス尺度が「楽天的思考・行動」, 「社交性」, 「生活での積極性」, 「状況分析行動」という 4 つの因子からなる個人内のレジリエンスと, 「友達・近隣資源」, 「家族資源」, 「専門家資源 (医師)」という 3 つの因子から構成される資源的レジリエンスという大きな 2 つのグループに分けられることが確認された。作成されたレジリエンス尺度とすでに確立された他の尺度との関連性を検討した結果, 各レジリエンス要因を持っている高齢者ほどうつ傾向になっていないという結果が明らかになり, レジリエンス要因が高齢者のうつ傾向を抑制する可能性が示された。他にも, 「友達・近隣資源」と「生活での積極性」の因子それぞれの得点が高いほど, ADL における手段の自立の程度も高いという結果が示された。

引用文献

井俣経子・中村知靖 (2008) 資源の認知と活用を考慮した Resilience 4 側面を測定する 4 つの尺度 パーソナリティ研究, 17, 39-49.

*本研究は, 「地域での生活に関する意識調査」として筆者を主査とする高齢者・障害者の住まいに関する研究会・調査班によって実施された。